

川井真由先生は神奈川県から推薦を受けて、令和5年4月からJICA(国際協力機構)の青年海外協力隊の一員として、ザンビア共和国に派遣されています。

## まゆ先生のザンビアうるるんにつき 13



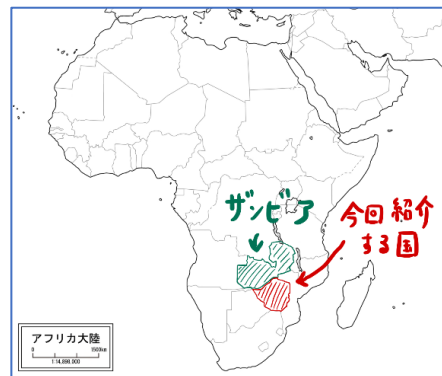
Tatenda. / Shiya Boga. (タテンダ / シーヤボーガ、ありがとう(ショナ語 / ンデベレ語)) 雨季なのに最近ほとんど雨が降らず、心も体も乾ききっている川井です。(連日30度超え、暑い。)

しばらく「番外編」ということで、ザンビア以外の国を紹介します。(ザンビアファンの皆さん、すみません。)今回紹介する国がどこの国であるかは最後に発表しますので、考えながら読んでみてください。

### 100兆ドル紙幣の価値

まずは地理の話から。この国はザンビアの南東に位置しています。首都はハラシです。公用語は英語、現地語は、首都ハラシではショナ語、第二の都市ブラワヨではンデベレ語などが話されています。

前回、植民地の話をしましたが、この国はかつてイギリスの植民地で、「南ローデシア」と呼ばれていました。独立したのは1980年、アフリカの中では比較的新しい国です。



ザンビアとの国境にある「ヴィクトリアの滝」や、13~15世紀に繁栄した王国の中心地「グレート・ジンバブエ遺跡」は有名な観光地で、どちらも世界遺産に登録されています。

「ジンバブエ」は、ショナ語で「石の家」を意味し、現在の国名は、この遺跡に由来しています。(もう答え出ていますね。)遺跡の中にある「鳥の石像」は国旗にも使われており、この場所は、この国の人々にとって象徴的な場所と言えます。



前置きが長くなってしまいました。地理や歴史も十分興味深いのですが、今回は、経済、平たく言うと、この国の「お金」について話したいと思います。

今から15年前、この国で世にも奇妙なお札がつくられました。その名も「100兆ドル紙幣」。右上の数字を拡大してみました。

こんなにも0が付いているお札、見たことありますか? 「一枚あれば億方長者ならぬ、兆方長者!」…と、いけば良いのですが、残念ながらこのお札、今は使えません。使われ

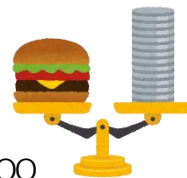


ていた時<sup>とき</sup>でさえ、最終<sup>さいしゅう</sup>的には1円<sup>えん</sup>の価値<sup>かち</sup>もなかったようです。

では、なぜ、このお札<sup>きつ</sup>はつくられたのでしょうか？

この国<sup>くに</sup>（…答えは「ジンバブエ」）は、1980年<sup>ねん</sup>の独立<sup>どくりつ</sup>を機<sup>き</sup>に、独自の貨幣<sup>どくじ かへい</sup>（お金<sup>かね</sup>）「ジンバブエドル」を使い<sup>つか</sup>始め<sup>はじめ</sup>ました。

当初<sup>とうしょ</sup>は、1ジンバブエドル300円<sup>えん</sup>以上の価値<sup>かち</sup>がありましたが、政府<sup>せいふ</sup>の失策<sup>しつさく</sup>やお金<sup>かね</sup>のつくり過ぎ<sup>すぎ</sup>など様々<sup>さまざま</sup>な要因<sup>よういん</sup>により、その価値<sup>かち</sup>がどんどん下<sup>くだ</sup>がっていきました。見方<sup>みかた</sup>を変え<sup>か</sup>ると、物価<sup>ぶつが</sup>がどんどん上<sup>あ</sup>がっていきました。物価<sup>ぶつが</sup>が上がることをインフレ<sup>いんぷれ</sup>（インフレーション）と言いま<sup>い</sup>すが、2008年<sup>ねん</sup>には、非公式<sup>ひこうし</sup>ながら年率<sup>ねんりつ</sup>2億3000万%<sup>まん</sup>（1個<sup>こ</sup>100円<sup>えん</sup>のパンが、1年後<sup>ねんご</sup>には2億3000万円<sup>まんえん</sup>払<sup>はら</sup>わないと買<sup>か</sup>えなくなる状態<sup>じょうたい</sup>）という驚異<sup>きょうい</sup>的なインフレ<sup>いんぷれ</sup>を記録<sup>きろく</sup>。100兆<sup>ちよう</sup>ドル紙幣<sup>しへい</sup>は、そのような異常<sup>いじょう</sup>事態<sup>じたい</sup>の中で生まれ<sup>う</sup>れたのです。



では、現在<sup>げんざい</sup>はどうなっているでしょうか。私<sup>わたし</sup>は昨年<sup>さくねん</sup>末<sup>まつ</sup>の旅行<sup>りょこう</sup>中<sup>ちゆう</sup>、ジンバブエのお金<sup>かね</sup>（現地通貨<sup>げんちつうか</sup>）に一度<sup>いちど</sup>も会<sup>あ</sup>いませんでした。買<sup>か</sup>い物<sup>もの</sup>やタクシ-に乗<sup>の</sup>る時<sup>とき</sup>などは、アメリカのお札<sup>きつ</sup>「USドル」<sup>つか</sup>を使い<sup>いっしょ</sup>に旅<sup>たび</sup>した友人<sup>ゆうじん</sup>は、「USドル」で支<sup>し</sup>払い<sup>らい</sup>、南<sup>みなみ</sup>アフリカ<sup>あふりか</sup>の「ランド」でお釣<sup>かえ</sup>りが返<sup>かえ</sup>ってきました。現地通貨<sup>げんちつうか</sup>はある<sup>あ</sup>るのですが、人々<sup>ひとびと</sup>に信<sup>しん</sup>頼<sup>らい</sup>されてい<sup>い</sup>ないので、USドルなど外国<sup>がいこく</sup>のお金<sup>かね</sup>で支<sup>し</sup>払<sup>はら</sup>う方<sup>かた</sup>が喜<sup>よろこ</sup>ばれます。



「現地通貨<sup>げんちつうか</sup>はインフレ<sup>いんぷれ</sup>がひどいので、私<sup>わたし</sup>たちはUSドルで預<sup>よ</sup>金<sup>きん</sup>をし、必要<sup>ひつよう</sup>な時<sup>とき</sup>に現地通貨<sup>げんちつうか</sup>に換<sup>か</sup>えてるよ。」と、タクシ-運<sup>うん</sup>転<sup>てん</sup>手<sup>しゅ</sup>が教<sup>おし</sup>えてくれました。また、「私<sup>わたし</sup>たちの国<sup>くに</sup>は、すごく住<sup>す</sup>みやす<sup>やす</sup>いところなのに、経<sup>けい</sup>済<sup>ざい</sup>はずっとダメなんだ。」とも言<sup>い</sup>っていました。

ジンバブエ最<sup>さい</sup>終<sup>しゅう</sup>日<sup>び</sup>、空<sup>くう</sup>港<sup>こう</sup>のおみやげ屋<sup>や</sup>さんで、3000円<sup>えん</sup>である物<sup>もの</sup>を買<sup>か</sup>いました。写<sup>しゃ</sup>真<sup>しん</sup>を載<sup>の</sup>せておきま<sup>ま</sup>す。本<sup>ほん</sup>当<sup>とう</sup>は「100兆<sup>ちよう</sup>ドル紙幣<sup>しへい</sup>」を探<sup>さが</sup>していたのですが見<sup>み</sup>つけられず、0が1個<sup>こ</sup>少<sup>すく</sup>なくなりました。「お金<sup>かね</sup>」としての価値<sup>かち</sup>はありませんが、「珍<sup>めづ</sup>しさ」の価値<sup>かち</sup>により3000円<sup>えん</sup>で売<sup>う</sup>られ、私<sup>わたし</sup>のよう<sup>よう</sup>に買<sup>か</sup>う人がいる…価値<sup>かち</sup>って何<sup>なん</sup>なんでしょうね。

